

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	理学療法学分野
学籍番号		院生氏名	青柳 達也
通学キャンパス			
論文題目	理学療法士養成課程における学内生活および実習時の不安について -身体的・精神的健康度の異なる学生の比較-		
審査結果(枠で囲む)	合格		
<p><審査結果の要旨></p> <p>1. 本論文は、精神的な問題を抱える学生に対する支援方策考案の一助とすることを目的に、理学療法学科学生が学内生活及び学外実習で抱く不安要因を調査したものである。本研究は、当大学及び所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施している。</p> <p>研究1では、2014年度に4年制大学理学療法学科に入学した90名のうち、3年生になるまでに退学もしくは留年した者、回答に不備があった者を除外した73名を分析対象とした。1年次にCornell Medical Index(以下CMI)を用いて精神的安定群(54名)と不安障害傾向群(19名)に分類し、学年ごとにCollege Life Anxiety Scale(以下CLAS)の下位尺度(日常生活不安、評価不安、大学不適応)について群間比較を行った。1・3年次の大学不適応得点のみ群間で差を示さなかったが、その他は精神的安定群に比べて不安障害傾向群は有意に高値を示していた。</p> <p>研究2では、研究1と異なる平成30年度3年次に在籍した70名の学生を対象に、4週間の評価実習前の11月にCMI健康調査に基づき精神的安定群(43名)と不安障害傾向群(27名)に群分けし、評価実習前後のCLAS下位尺度得点及び各群間のCLAS下位尺度得点について比較している。評価実習前及び実習後ともにすべてのCLAS下位尺度において、不安障害傾向群が有意に高値を示し、不安障害傾向群の評価不安得点だけが実習後に有意に高値を示していた。このことから不安障害傾向の学生は、自らの学力や技術的な自信が持たず、実習後になり成績のことを気にして不安を抱いているとまとめている。</p> <p>研究3では、研究2同様の対象のうち、退学もしくは実習中止となった者、回答に不備があった者を除外した60名を分析対象とした。4年次の診療参加型臨床実習前後のアンケート調査を通して、CLAS調査で明らかにできなかった臨床実習に対して抱く具体的な不安要因の特徴を不安障害の程度により分析を行っている。その結果、不安障害傾向の学生(20名)は、対人関係に不安を感じ、疲労感や身体的・精神的な症状を訴えているため、実習期間を通して、実習先のスタッフや患者と頻繁にコミュニケーションがとれる環境を整え、身体的・精神的な症状をきたした時は、養成校と連携し対応していく必要があると結論付けている。</p> <p>本研究の新規性は、4年制大学理学療法学科学生の不安障害の程度を明らかにするとともに、不安障害傾向の学生の学内生活における不安の経時的変化及び学外実習における不安要因を調査し、不安軽減のための学生支援方法の考案に貢献できる研究として評価できる。</p> <p>2. 審査会は1回開催し、実施前に各審査員から確認及び修正事項についてコメントし、審査会での報告に反映を促した。研究概略を含む多くの加筆修正を求めたところ概ね適正に修正された。</p> <p>3. 審査会の口頭試問においては適切に応答していた。</p> <p>4. 以上の結果を踏まえ、審査会の審査員全員で協議した結果、本論文が著者に博士(保健医療学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	<p>主 査 森田 正治</p> <p>副 査 渡邊 観世子</p> <p>副 査 森山 ますみ</p>		